

平成 21 年 6 月 15 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2008

課題番号：19520166

研究課題名（和文）高度経済成長期の社会と人間—中国との比較を通して

研究課題名（英文）The relationship between the society and the human beings in the Era of Rapid Economic Growth: Compared with that of China

研究代表者 渡邊 正彦 (WATANABE MASAHIKO)

玉川大学・リベラルアーツ学部・教授

研究者番号:40259065

研究成果の概要：高度経済成長以前の状況では、一国の文化が一つの価値観に収斂されていく傾向が顕著であるが、しかし高度経済成長によりもたらされた経済的余裕を背景として、個人の価値観が多様化し、それに即した表現が様々な形で現れてくるようになり、そして、そのような状況の中で、統一感を喪失することを余儀なくされた人々が、必然的に孤独感を抱え込み、そのはけ口を表現に求めるようになる傾向が看取される。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,100,000 円	330,000 円	1,430,000 円
2008 年度	1,000,000 円	300,000 円	1,300,000 円
年度			
年度			
年度			
総計	2,100,000 円	630,000 円	2,730,000 円

研究分野：日本文学

科研費の分科・細目：日本文学

キーワード：比較文学 比較文化 日本文学

1. 研究開始当初の背景

本研究は2005年から2006年にかけて、日本学術研究会「基盤研究（C）」に採択された研究課題「日本と中国の〈高度経済成長期のメディア〉と表現に関する多角的研究」で得られた成果、およびその研究過程に折から「高度経済成長」の渦中にあつた中国北京の首都師範大学で2006年9月に開催された国際シンポジウム「中日高速经济增长期的媒体与表现学术研讨会」に本研究の代表者と分担者全員が参加発表し、そこで多くの中国人研究者と活発な意見交換を行う中で得られた「高度経済成長下の社会と人間」のありように関する問題意識を、さらに発展させるた

めに企てられたものである。

2. 研究の目的

急速な経済成長がもたらした繁栄を享受しながら、その一方でそれがもたらした負の側面を社会問題として抱えた中国の現状と、過去にそれを経験した高度経済成長下の日本の状況とを文化面から比較することにより、「高度経済成長」という現象が国境を越えて、その社会にもたらす影響の普遍的側面について考察していくことを目的としたものである。

3. 研究の方法

「高度経済成長」のもたらす普遍的な文化状況の根本にあるものを看取すべく、文化の諸領域に広く目を配っていくことを心がけ、また中国側の研究者と積極的に意見交換を行いながら、リアルタイムに状況に関する知見を入手し、その上に立って日本や中国といった枠組みにとらわれずに、考察を進めていく。

4. 研究成果

(1) 総論—渡邊 正彦

昭和三十年代の初頭、戦後の復興期も一段落した日本は高度経済成長期を迎え、経済的にもある程度の余裕を得た国民たちに生じた文化的欲求を満たすべく、雑誌や週刊誌が相次いで創刊され、国民が手に入れる情報量は、テレビなどの新たなメディア媒体から発せられるリアルタイムな情報と相まって飛躍的に増大した。そのような状況の中で、一般大衆の広範にわたる支持を得た小説が、松本清張の作品であった。彼の「社会派推理小説」が支持された理由としては、三井三池争議に象徴されるような労働者の不満が当代の社会に鬱積しており、その点からして官僚の汚職事件を絡ませた彼の小説の筋立てが、いっそうのリアリティを持って読者に受け入れられた点が挙げられるだろう。

一方、海外からの文化の移入に神経質な中国においても、清張の作品は改革開放以前から翻訳され受容されていたが、その理由は清張作品にあらわれた当代の日本社会の暗部を資本主義のイデオロギーの墮落を象徴するものとして受け止め、その点を国民に啓蒙するためであった。しかし改革開放後、イデオロギー優先の文学が飽きられ、小説としての「おもしろさ」が希求される風潮に乗り、清張作品は中国の一般大衆の中に浸透していく。特に解放後の中国で、物質的な富が何にも増して優先されようとする風潮の中で、汚職事件をストーリーに取り込んだ清張ミステリーは、リアリティを持ったものとして一般大衆に受け入れられていったといえる。

このように日中両国の高度経済成長期における清張ブームの原因には、日中両国で共通した理由が看取される。一般に小説を受容する社会の関心の所在が、その時代の社会の好む小説の内容に反映するのは当然であろう。ところで、現在中国の若者たちの多くは、村上春樹の作品に親しみ、共感を寄せている。中国の若者は、春樹の作品に「癒し」を感じるということだが、中国でも上海など都市部の富裕層（小資）や大学生を中心に絶大な人気を博しているという。改革開放以前の1989年に、言論の自由、民主化を求めておきた天安門事件は、日本で高度経済成長期の渦中に起きた安保闘争、労働争議、大学紛争と同様

に、権力により鎮圧された。そして、既存の権力に反発しながらも、それを動かすことのできないことを知った人々が、社会を変革することよりも物質的富を享受する方向に走っているのが中国の現状であろう。

村上春樹の作品は、大学紛争に象徴される集団闘争が挫折した後の日本の若者たちの空虚な状況を描くことから出発した。一方中国でも、自身の属する集団から精神的に離脱し、個人本位の価値観を築こうとすることを独りよがりを感じてアイデンティティを喪失することによりもたらされた空虚さ、それが若者を覆っているとするならば、それは大学紛争挫折後の日本の若者の状況と酷似しているといえよう。おそらく、この点に日中両国で春樹の作品が支持される共通の地盤があるといえる。

このように見てくると、清張から春樹へという両国の文学に関する嗜好の変遷が、高度経済成長という現象が一般大衆にもたらす国境を越えた普遍的影響の一端を、如実に表していると考えられる。高度成長以前あるいは初期の状態では、人々は日々の生活に必死であり、その状況を改善していくためには、状況を改善すべく集団化して行動するしかなかった。しかし、その闘争に敗れ、個人の多様なニーズを物質面で満たすことができる条件が整っていくと、人々はそれを享受する代償として集団に対する帰属感を抱くことができなくなる。物質的富を実現させるために、能率性、合理性を最優先課題として実現しようとする風潮は、そこに人間性が介在しないという点で、その空虚さをさらに大きくするのである。

日本では1960年代から知識人の右傾化、伝統回帰という現象が見られるが、それも自身のアイデンティティを再探索しようとするその当時の日本の傾向を反映させたものと考えられよう。一方中国では、2005年に反日デモが特に若者を中心に繰り広げられたのも、自身の帰属すべき集団を求めようとした結果であるとも考えられよう。いずれにしても、高度経済成長後を生きなければならぬ状況の中で、個人としての自分を位置付けるべき社会を持てなくなった一般大衆の進むべき道を、日中両国とも今後模索していかなければならないだろう。そして、今回の研究で得られた成果は、日中両国において、様々な方面から大衆文化研究を今後進めていく上での一つの視座となりえると考えている。

最後に、この総論は、本研究の成果として研究代表者がまとめたものであるが、つづく研究分担者の各論を元に得られた部分の大きいことを付記しておく。

(2) 科学研究費報告書—石川 巧

本研究では、まず高度経済成長期の文学と同時代に求められたリテラシー能力の相関性について研究した。また、特に中国との関係でいえば、川端康成と三島由紀夫の往復書簡を読むことで文学の国際化の問題を検証し、文学における〈翻訳〉のあり方を考察し、『夢千代日記』論では敗戦後の残留孤児問題が日本の文学作品のなかでどのように描かれているかを論じている。具体的な内容は以下の通りである。

①作家としての〈立場〉をつくるということ——『川端康成／三島由紀夫 往復書簡』を読む

『川端康成／三島由紀夫 往復書簡』（平成9・12、新潮社、初出「新潮」平成9・10）は、川端康成の作家的資質と、彼が文壇において揺るぎない〈立場〉を維持し続けることができた要因を考えるうえで極めて興味深いテキストである。また、この往復書簡からは、川端康成のノーベル賞受賞前後の文学状況、すなわち、高度経済成長期における日本文学界の動向、翻訳事情、海外からのまなざしなどがありありと窺える。本論では主に川端康成の側から往復書簡を読み解くことで、「作家としての立場をつくる」とはどういうことなのか、そこには文学に対するどのような認識が潜んでいるのかを省察し、高度経済成長期の日本文学がどのようにして世界に認められていったのかを明らかにした。

②太宰治の読まれ方——読書感想文の世界に生き延びる「人間失格」——

本稿では、青少年読書感想文全国コンクールの入選作品集『考える読書 中・高校生の部』を分析対象として、高度経済成長期中・高校生が太宰治の「人間失格」をどのように読んでいたのか、その読み方にはどのような〈型〉があるのかという問題を系譜的にたどった。昭和三十年代、読者のピューリタニズム精神を喚起する作品として読書感想文の世界に進出した「人間失格」は、昭和四十年代に入ってから、弱さを貫き続ける強さへの連帯、現実社会の醜悪さをニヒリズムによって描くことへの陶酔といった読みの段階を経て、主人公に対する作者の批評的な視線をすくいあげようとする方向にむかっていく。読者たちはこの作品に自分自身の陰面を発見し、こちらの心理や感情の動きに応じて作品世界が多様に変化していくことに驚嘆したのである。

③教育言説のなかの有島武郎

有島武郎の小説のなかで教科書の定番作品といえるのは、昭和25年以降に圧倒的なシェアを誇っていた「生まれ出ずる悩み」である。だが、この作品は日本が右肩上がりの

経済成長を遂げていた時代、懸命に働けば生活が豊かになるという実感を人々が持ちえた時代にもはやされたにもかかわらず、昭和52年を最後にすべての教科書から消えている。本稿では、この現象に着目し、青少年を主な読者に想定して書かれた作品を数多く有する有島作品のなかで、なぜこれほどまでに「生まれ出ずる悩み」だけがもてはやされたのか、という問題を検証した。

④〈夢千代日記〉における原爆・白血病・吉永小百合

〈夢千代日記〉シリーズの第三作「新・夢千代日記」では、原爆というモチーフはもちろんのこと、人間の〈死〉そのものを思索的に表現しようとする意図が明確になっている。前二作では、あくまでも胎内被曝による白血病の発症という現在性の問題として原爆が語られているのに対し、「新・夢千代日記」では夢千代自身に広島爆心地を歩かせ、そこに母が被爆した瞬間を「モノクロームの世界」として現出させたり、付添い看護婦として数多くの原爆症患者を看取ってきた母の友人・玉子を歴史の証言者として登場させたりして、過去の惨状に肉迫しようとする描き方がなされている。こうした創作の背景をふまえたうえで、本稿では、「夢千代日記」、「続・夢千代日記」に描かれた諸要素を整理したうえで、特に「新・夢千代日記」の分析に重点を置き、ドラマの創作という方法によって〈あのとき〉静止した時間をあらためて動かそうとしてきた早坂の原爆に対する認識を明らかにし、このドラマ作品から、高度経済成長期の日本における敗戦の傷跡、経済的な繁栄を遂げた社会の裏側でいまだ苦しみ続けていた人々の嘆きを抽出した。

⑤〈小論文〉に求められているもの

本稿では、日本の高等教育においてリテラシー能力というものがどのように位置づけられ、どのような方法を用いてその能力向上が図られてきたかを総合的に考察するために、マークシート方式が導入されて以降の小論文入試に焦点をあて、その科目が迎えてきた歴史的過程を踏まえながら分析を行った。

(3) 高度成長期の読者状況——藤井 淑禎

日本で映画が斜陽に向かうのは1960年後半からだが、高度経済成長や大衆社会化状況の出現、情報化社会の発達などによって、日本人の余暇の過ごし方や娯楽手段はどんどん変化し、多様化して来た。大雑把に言えば、その10~20年後くらいからは文学が斜陽化し、さらにその10~20年後くらいからは茶の間の娯楽の王様であったテレビも斜陽化して、現在に至っていると見ることができよう。現在ではインターネットの発達と普及によ

り、余暇利用や娯楽時間の多くは、インターネットに関係するもので占められるようになりつつある。もちろん、世代差や地域差、そして個人の教養や趣味の違いによって、余暇利用の仕方や娯楽手段はさまざまだが、大勢を占めつつあるのがインターネット関連の勢力であることはまちがいない。このような考え方は、一口で言えば、社会の変化と娯楽の盛衰とを結び付けて説明しようとするもので、もちろんそれなりの説得力はある。映画や文学のような旧式の娯楽が社会の変化とともに次第に力を失い、テレビやインターネットのような新時代の娯楽が、それらにとって代って進出してきた、という理解の仕方だ。

こうした考え方を仮に、外在的な理由重視型、とするなら、娯楽手段の斜陽化にはそれとは別に、実は、それぞれに内在的な理由や必然性があったのではないかと考えることも可能だろう。とりわけ文学の場合は、この内在的な理由に左右された面が大きかったのではないだろうか。1950年代から60年代にかけての日本、日本の呼び方で言えば昭和30年代前後の日本は、文学の黄金時代とも言うべき時代だった。そのなかでも圧倒的な勢力を誇っていたのは小説だった。この時期、名作小説中心の文学全集が次々と刊行され、新旧の小説の出版や新聞・雑誌での小説連載も大変活発で、また一方では、それらを多くの庶民が手にとり、時間がたつのも忘れて読書に没頭したのが、この時代の特徴だった。

文学の黄金時代と称されていた昭和30年代、庶民は決して、純文学と新作中心の既成の文学史に記述されているような作品を読んでいたのではなかった。というよりも、むしろ、戦前の旧作・名作類や大衆向けの小説こそが多くの支持を集め、それらこそが文学の黄金時代を支えていたのだった。難解な哲学が文学の衣をまとっただけのような新作は敬遠するいっぽうで、感動や教訓を得るためには名作を、暇つぶしや娯楽のためには大衆小説を、というのが当時の平均的な読者のありようだったのである。また、そうした啓蒙的・教訓的な名作文学こそが、高度成長期という人類史上かつてない上昇期の人々には、心の糧として必要であったのである。もっとも、そうは言っても、名作とて永遠に不滅でいることはできない。内容も文体も次第に古びてくるだろうし、読者の感性とのズレも次第に大きくなっていくだろう。こうして時代が下るにつれて、一人また一人、一作また一作と、文豪とその名作たちは読者の前から姿を消していくこととなったのである。

では、果たして新しい文学は、それらに代わる作品を生み出しえただろうか。かつてのような感動や教訓を得るためには名作を、暇つぶしや娯楽のためには大衆小説を、という

ような関係を築きえただろうか。残念ながら、戦後の文学はそうした方向に進むことはなかった。1950年代、1960年代の文学の閉鎖性、独善性、難解さを受け継ぐような方向に、それ以降の文学も進んでいったのだった。だとしたら、それに愛想を尽かした庶民読者の文学離れは必然の結果でもあったのだった。1970~80年代以降顕著になる文学の斜陽化の内在的理由は、このようなものであったと考えられよう。

(4) 日本児童マンガの変質と中国のマンガ政策一瀧田 浩

高度成長期における日本と中国の大衆文化に焦点を当てた私の研究対象は、流行音楽から漫画に軸足を移してきた。その大きな理由は、現在の中国において漫画やアニメーションは国家的な支援のもと発展をめぐしているところにある。日本の漫画やアニメーションは資本主義体制のもと、創作性の稀薄化、暴力・性表現の過激化等、負の側面を孕みつつも、消費者の欲望を大きく制限することなく表現を推移させてきた。しかし、中国においては違う。国家が漫画・アニメーションをひとつの大きな市場とみなし、市場から利益を手に入れようとしており、また暴力・性に関する表現の規制も維持されている。

中国と日本の漫画の問題を考える上で、日本を代表する漫画家・手塚治虫の以下の発言は示唆に富む。「お上から、マンガは一切まかりならんというかたちで、マンガ雑誌と単行本に関しては統制をして、みんなの顔色が変わったときに、そこで初めてシベリアにマンガをもう一回見直して、われを知るんだ」(石ノ森章太郎対談集『漫画超進化論』1989〔平成元〕年3月、河出書房新社)。ここに、消費者の欲望にじかに向かい合う漫画家の本音を見て取ることができるだろう。漫画をめぐる状況にうまく対処しえなかった者の苦衷を述べたのが手塚であるが、漫画家の梁山泊として有名な「トキワ荘」で手塚と共に過ごしたことのある寺田ヒロオは、健全で教育的な漫画への郷愁を捨てきれず、筆を折った漫画家である。彼はあるインタビューの中で次のように答えている。「『児童文化を育てる会』という組織を全国の父母が会員三万人を目標に創る。会費は一ヶ月千円。つまり毎月一冊千円の児童雑誌を三万部発行出来るわけだ。そうすれば作家も、その本を作る出版社も採算が採れる。採算が採れば良心的な漫画も生まれ、育って行くし、父母も安心してよい漫画を子供に与えられる」(『えすとあ』季刊2号、1982〔昭和57〕年2月)。漫画というメディアに良心を介したネットワークを作ろうという趣旨である。手塚も寺田も、高度成長期を経て肥大化した漫画というメディアを支える消費者の欲望に代わる基盤を

求めていたのだ。

一方、中国には国家主導の「五一五五」というプロジェクトが存在する。「飛躍が待たれる中国マンガ」(『光明日報』2000[平成12]年6月3日)によれば、「一九九五年、江沢民総書記と李鵬総理はそれぞれ上海美術映画制作所と浙江人民美術出版社に書簡を送り、『広範な動画芸術工作者が党の文芸方針の指導のもと、思想性、芸術性、鑑賞性が高レベルで統一された芸術的逸品を創作し続け、少年・児童のために更に多くの更に優れた精神の糧を提供して、我が国独自の動画のヒーローが少年・児童の手本・友達となるようにしてほしい』と求め、「一九九五年末、中国共産党中央宣伝部と新聞出版署は『中国児童動画出版プロジェクト』、略称『五一五五』プロジェクトを始動させた。これは二三年以内に五つの動画出版基地を建設し、大型児童動画シリーズを一五組重点的に出版し、動画、マンガ雑誌を五誌創刊して、児童少年向読み物出版事業全体を全面的繁栄に向かわせようとする」ものであると報じている。楊鵬の「中国のマンガは何がネックなのか」(『北京日報』2000[平成12]年10月18日)、BENJAMIN「マンガ 最も取るに足らない芸術」(『芸術世界』2001[平成13]年10期)等によって、公的指導と介入による五一五五プロジェクトの限界説を知ることができるが、重要なのは手塚の懸念や寺田の提案を国家が担うことの困難さである。

個の表現を国家が規制することの問題性は今さら繰り返すまでもないが、若年層・幼年層に開かれた漫画・アニメーションメディアは欲望と短絡的に結託し、肥大化した市場は表現の深化・洗練を置き去りにしがちである。高度成長期の日本の漫画の状況と問題点に関する考察と、中国のそれを架橋することで、漫画・アニメーションの表現とその基盤について新たな展望が得られることが期待される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

- ①藤井 淑禎「文学が庶民に愛されていた時代」『日語学習と研究』30号 2009年 査読無 P1-7
- ②石川 巧「敗戦後の福岡における演劇・芸能復興年表」『市史研究 ふくおか』査読有 2009年 P30-56
- ③藤井 淑禎「名作文学と国民文学」『立教大学日本文学』査読無 101号 2008年 P28-38
- ④石川 巧「〈夢千代日記〉における原爆・白血病・吉永小百合」『原爆文学研究』27巻

13号 2008年 査読有 P9-40

[学会発表] (計 4 件)

- ①渡邊 正彦 「『集団』から『個人』へ」中日高速経済成長期の媒体と表現学術研究会 2008年9月6日 中国 北京 首都師範大学
- ②石川 巧 「高度経済成長期の文学における〈日本回帰〉」中日高速経済成長期の媒体と表現学術研究会 2008年9月6日 中国 北京 首都師範大学
- ③藤井 淑禎 「高度成長期の読者と読書」中日高速経済成長期の媒体と表現学術研究会 2008年9月6日 中国 北京 首都師範大学
- ④瀧田 浩 「日本児童マンガの変質と中国のマンガ政策」中日高速経済成長期の媒体と表現学術研究会 2008年9月6日 中国 北京 首都師範大学

[図書] (計 1 件)

- ①石川 巧・瀧田 浩・藤井 淑禎・渡邊 正彦編 玉川大学出版部 『高度成長期クロニクル 日本と中国の文化の変容』 2007年

渡邊 正彦 「高度成長期と小林秀雄—『考へるヒント』のベストセラー化を軸に」 P97-P115

石川 巧 「モラトリアムとしての〈知性〉—柴田翔『されど われらが日々』論」 P163-200

藤井 淑禎 「腐り始めた地球と水上勉—高度成長の影の部分をめぐる」 P141-162

瀧田 浩 「高度成長の終わりとはっぴいえんど—批評としてのユートピア」 P117-P139

6. 研究組織

(1) 研究代表者

渡邊 正彦(WATANABE MASAHICO)
玉川大学・リベラルアーツ学部・教授
研究者番号:40259065

(2) 研究分担者

石川 巧(ISHIKAWA TAKUMI)
立教大学・文学部・教授
研究者番号:60253176

藤井 淑禎(FUJII HIDETADA)
立教大学・文学部・教授
研究者番号:30132252

瀧田 浩(TAKITA HIROSHI)
二松学舎大学・文学部・准教授
研究者番号:30299888